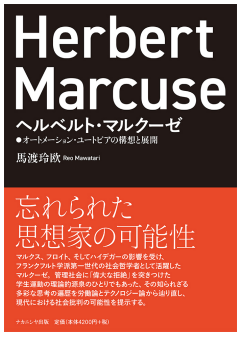
REVIEW ESSAY

馬渡玲欧、2025
『ヘルベルト・マルクーゼ――オートメーション・ユートピアの構想と展開』
ナカニシヤ出版



「1968 年のマルクーゼ」を超えて [1]
――馬渡玲欧『ヘルベルト・マルクーゼ』を読む――

市川　結城・松崎　匠

1　はじめに

近年、英語圏をはじめとしてマルクーゼ研究への関心が高まっており、エコロジー、疎外、ユートピア、革命、弁証法など主要な論点を再検討する著作が次々に刊行されている（Feenberg 2023; Reitz 2022）[2]。こうした動向は 2019 年の時点で既に「マルクーゼ・ルネサンス」と呼ばれているが（Višić 2019）、それは今日でも継続しているようである。こうした事態は、気候変動や政治的暴力、不平等といった問題に対して社会運動という形で応答する社会的動向を反映したものであり、今後も継続することが見込まれる。また 2023 年にドイツ・フランクフルトの社会研究所が設立 100 周年を迎えたことで、世界的に批判理論第一世代の遺産を回顧する動きも見られるようになっている。加えて批判理論第四世代と呼ばれる新たな潮流、すなわちラーヘル・イェッギやハルトムート・ローザといった面々も、疎外や物象化といった第一世代の「古い」問題系への回帰とその再構築を試みており、これもマルクーゼ再読につながる可能性を有している。

こうした事情は、ハーバーマスやホネットにより「乗り越えられた」とされ、教科書的に顧みられる傾向のある第一世代の業績を見直す土壌となりうる。つまりホルクハイマーやマルクーゼといった「忘れられた」思想家の思想やその位置価を再び掘り返す作業につながっていくことだろう。

以上の状況を踏まえると、馬渡玲欧氏（以下、馬渡）の近著『ヘルベルト・マルクーゼ――オートメーション・ユートピアの構想と展開』は、こうした流れに棹さすものであり、時宜に即した著作だと言える。しかもそれが他の論考と一線を画するのは、これまで通例となっている「1968 年」の文脈以外のマルクーゼ、すなわち「忘れられた」マルクーゼの思想を再読する意義と可能性を提示することで、独自の新規性を有している点にあると言える。

以下では、まず 2 章で本書の概要を示す。次に 3 章では、馬渡の提示するマルクーゼ像の意義をオートメーション論と科学労働者という「新たな感性」を持つ主体という二つの論点

に重点を置く形で評価する。そして馬渡の議論が現代の技術論、オートメーション論、現実の労働の状況の中で持つポテンシャルや学説研究としての新規性について提示しつつ、残された課題として馬渡の議論の不明瞭な点も指摘していく。さらに４章では、ホネット以降の批判的社会理論と労働の問題圏において、マルクーゼの「科学労働」論にいかなる可能性があるのかを検討する。その際、ホネットの承認論を参照し、科学労働者の「連帯」という側面に光を当てて見ることで、マルクーゼの「生産性」批判は科学労働者自身による「承認をめぐる闘争」の実践として再構成可能であることを明らかにする。最後に５章では本論の議論を要約する。

2　本書の概要

馬渡は、現行の「革命的なマルクーゼ像」に代わる新たなマルクーゼ像をえがき出すことを通じて、その現代社会論としての意義をも示そうとする。馬渡のえがき出す独自のマルクーゼ像とは、「初期の『労働と遊びの一致としての生命活動』構想が、最終的にオートメーション・テクノロジーの『触媒』機能によって『対象と戯れる科学労働』を可能とする構想に帰結する」（馬渡 2025a: 4-5）、というものである。このようなマルクーゼ像の提示は、マルクーゼに関する既存の学説史理解を更新するという意義をもつだけでなく、「現代の労働環境に対する批判的視座の構築」（馬渡 2025a: 5）という理論的意義をも有する。というのも、「生産性」概念に対するマルクーゼの批判（これについては後述する）は、市民社会の業績主義に対する批判としてのポテンシャルをもっているからである。

馬渡は本書で、マルクーゼの思想とその展開を「労働と遊びの一致」という観点から一貫して読み解いていくことで、「オートメーション・ユートピアの思想家」というこれまでにない独自のマルクーゼ像をえがき出すことに成功していると言えるだろう。本章では、本書の内容の要約を通して、「オートメーション・ユートピア」の構想の中心に「科学労働」の概念が位置づけられることを明らかにする。

2–1　内容の要約

本書は、序章と終章を含めた全 10 章構成である。以下に目次を示し、その内容を章ごとに要約していくこととする。

はしがき
序章　「労働と遊びの一致」から照らし出す「オートメーション・ユートピア」
第 1 章　マルクーゼ評伝
第 2 章　生命活動としての労働——1930 年代の労働論・一
第 3 章　「労働と遊び」論のはじまり——1930 年代初頭の労働論・二
第 4 章　フランクフルト学派第一世代の問題関心——1930 年代の「労働と文化」をめぐって
第 5 章　「文化」の生産力化——1930 年代後半の労働国家批判
第 6 章　テクノロジー化する労働——1940 年代初頭の技術論

第 7 章　ナチス・ドイツにおける労働者の統制――1940 年代中盤のドイツ・テクノクラシー体制批判

第 8 章　生産性批判の展開と「触媒」としてのオートメーション・テクノロジー――1950 年代以降のオートメーション論

終章　今後の課題と展望

序章では、問題の所在とマルクーゼ研究の動向、本書の構成について述べられる。「はしがき」で述べられているように、馬渡が本書で取り組むのは「『1968 年』に対する様々な反応からいったん距離を置きつつ、マルクーゼ思想の可能性の中心をいかに見定めることができるのか」（馬渡 2025a: iv）、「そもそもマルクーゼが何に関心を持ち、1960 年代に脚光を浴びるまでに何を考えてきたのか」（馬渡 2025a: iv）という問いである。この問いに取り組むために馬渡が手がかりとするのは、「労働と遊びの一致」という初期マルクーゼの構想であり、この構想が 1960 年代のオートメーション論にどう接続していくのかを本書全体を通じて跡付けていくことで、マルクーゼの思索を一貫した視座のもとで捉えることが可能になる。馬渡によれば、このようなマルクーゼ読解の可能性は、既存のマルクーゼ研究において見落とされてきた。序章第 2 節によれば、マルクーゼ研究の動向が多岐に渡るが、馬渡はこれらの動向を（１）抑圧された「性」の解放とそれを梃子とする体制変革の構想、および（２）管理社会における科学技術のイデオロギー批判の 2 点に分ける。馬渡はその上で、（１）の動向については、「偉大な拒絶」（『一次元的人間』）をめぐる受容のされ方は一面では正当であるが、「労働と遊びの一致」という観点からより広範な生命活動としての「エロス」を読み解く必要があると述べる。（２）の動向についてもやはり、「労働と遊びの一致」の構想を踏まえて、マルクス的な「生産力主義」者としてのマルクーゼ理解を刷新する点に社会学史上の意義があると述べられる。

ここで言葉の意味について確認しておこう。まず「労働と遊びの一致」とは、「自然や他者との戯れ（Spiel/play）を通して、新しいものを生成し、世界のなかで自己の存在を確かめていく生命活動としての肉体・精神労働」（馬渡 2025a: 2）のことを指す。次に「オートメーション・ユートピア」は、馬渡が社会思想史・社会史家の良知力における「生産力ユートピア」説から着想を得た言葉である。それは言ってみれば、オートメーションの技術的進歩による労働の質的変容の方向を指し示している。後に明らかになるように、この「オートメーション・ユートピア」の中心に位置するのが、「労働と遊びの一致」の構想にほかならない。

第 1 章はマルクーゼの評伝であり、基本的な伝記的事実について記す。マルクーゼは 1898 年 7 月 19 日にこの世に生を享け、1979 年 7 月 29 日にこの世を去った（享年 81）。馬渡は、マルクーゼの生涯を次の 6 つの時期に区分している。すなわち、（１）幼少期～青年期（1898 年～1928 年頃）、（２）ハイデガー時代～フランクフルト社会研究所への参加（1928 年頃～1940 年頃）、（３）フランクフルト社会研究所からの離脱とアメリカ政府への戦時協力（1940 年代前半）、（４）戦後アメリカにおける学術活動（1945 年～1965 年頃）、（５）学生運動期の旺盛な講演活動（1960 年代後半）、（６）晩年の思想（1972 年頃～1979 年）、という 6 つの時期である。特に（２）の時期については本書第 2 章～第 5 章で、（３）の時期については第 6

章と第 7 章で、そして（4）と（5）の時期については第 8 章でそれぞれ詳細に論じられる。

第 2 章と第 3 章は、1930 年代初頭のマルクーゼ労働論を再構成する。まず第 2 章は、『ヘーゲル存在論と歴史性の理論』（1932 年）を素材に、マルクーゼの思想の根本に「生命活動としての労働」があることを明らかにする。「生命活動としての労働」とは、『ヘーゲル存在論と歴史性の理論』における労働論を解釈するために馬渡が導入する観点である。それはおよそ次のようなプロセスのことを指す。自分自身を概念的に把握する「自己意識」としての「生命」は、「否定性」という特徴を有する。つまり生命は「自己の否定」、すなわち他在における自己確証と還帰を繰り返すことで自己の欲求を満たしていく。その際、生命は他者を自己の生命の一部として承認し、互いに他者の死をめざし「生と死を賭けた闘い」を繰り広げる。ここに成立するのは自己（主人）と他者（奴隷）の間の宥和的な共同関係ではなく、常に否定性を帯びた共同関係である。そしてこの意味での「承認をめぐる闘争」を経て、生命は他者の生命を自己の内に取り入れ、自己を世界のなかで確証していく。ここまでが「承認をめぐる闘争」としての労働の段階である。そしてこのような「承認をめぐる闘争」としての労働による自己確証には「疎外」が伴う。「疎外」とは、労働による世界のなかでの自己確証には他者の犠牲を伴うにもかかわらず、そのことを忘却したまま新たに同じ過程を繰り返していくことで、現実世界と当の自己意識との関係性がだんだんと薄れていってしまうことである。以上のような一連のプロセスが「生命活動としての労働」と呼ばれる。馬渡は、マルティン・ハイデガーにおける民族共同体に奉仕するための労働行為との対比で、マルクーゼにおける自然を対象化（し破壊）する労働の特徴を浮かび上がらせている。そして世界のなかでの自己確証を伴う疎外された労働が対象化の破壊をもたらし、資源の収奪や「集－立」に至るというマルクーゼの認識が、後の研究で対象との戯れの契機を自身の労働論に取り入れることの契機になっていると指摘する。

第 3 章は、マルクーゼの論文「史的唯物論の基礎づけのための新史料」（1932 年）、および「経済学的労働概念の哲学的基礎」（1933 年）を素材に、「生命活動としての労働」論が、自由の領域における精神労働を可能にする「遊び」論にどう展開していくのかを明らかにする。マルクーゼは独自の初期マルクス研究を踏まえて、「生命活動としての労働」を「必然の領域における労働」と捉え直す。「必然の領域における労働」とは、「自然的」かつ「感性的」な存在である人間が日々の欲求を満たし、必需品を生み出していくための労働である。その一方で「生命活動としての労働」は「必然の領域における労働」に留まらない要素をも併せ持つ。それは精神的な充足を得ることのできる「自由の領域における労働」であり、「美の法則」に従う生産（芸術活動）である。この「自由の領域における労働」は疎外された労働に伴う対象との闘争や葛藤を緩和することができる。これを可能にするのが労働の対概念としての「遊び」、つまり対象との戯れである。「遊び」は、対象の素材の性質に規定される労働と違い、遊ぶ者の意志に左右される。「遊び」によって人間は気ままに対象と戯れ、対象に関与しているにもかかわらず対象から自由になる。この「遊び」が自然や他者といった対象に対する十分な予測を可能にすることで、「自由の領域における労働」が成り立つ。馬渡は、このようなマルクーゼの労働論が産業社会下における近代的労働主体を再考するような立論に

なっていること、そして 1930 年代にハイデガーやエルンスト・ユンガーが展開した労働国家論に対する批判的視座を提供していることを指摘する。

第 4 章は、マルクーゼの学説の検討からはいったん離れて、フランクフルト学派第一世代における「労働と文化」に関する問題関心について整理する。馬渡は、労働をめぐる理論的批判は様々におこなわれているが、フランクフルト学派の労働論にはさほど関心が払われてこなかった傾向にあると指摘する（馬渡が指摘するように、すでに 1930 年代後半にホルクハイマーとプロレタリアートとの間には「微妙な距離感」があった）。そこで馬渡は、フランクフルト学派の第一世代の面々にとって労働（と文化の関係性）がどのように認識されていたのかを問うことで、当時の学派の「労働と文化」の問題圏を素描し、彼らの社会批判の複数性を提示していく。すなわち、「文化制度による労働者の社会統合」（ホルクハイマー）、労働者にとっての個別具体的な文化の実態を捉えようと試みる「ワイマール労働者調査」（フロム）、文化産業の内部から文化産業を変えようと試みていたという「アドルノの意外な側面」に光を当てることで、「文化産業論と異なる形での、労働と文化の問題意識に基づく社会批判の可能性が 1930 年代に緩やかに存在していた」（馬渡 2025a: 121）と問題提起する。それでは、マルクーゼ自身は労働と文化の関係性についてどのような問題関心を持っていたのだろうか。この問いに取り組むことが次章の課題である。

第 5 章は、1930 年代初頭の「労働と遊び」をめぐる議論が、1930 年代中盤以降にどのように変質していくのかを跡付けていく。その際の素材は、マルクーゼの文化論とかかわる諸論文、すなわち「文化の肯定的性格について」（1937 年）、「哲学と批判的理論」（1937 年）、そして「快楽説批判」（1938 年）である。この時期のマルクーゼは、市民社会の「肯定的文化」と労働国家の「英雄文化」をともに批判するなかで、自らの「遊び」論を深化させていく。市民社会の「肯定的文化」とは、「真・善・美」という文化的価値が、身分にかかわりなくすべての人々に内面化された「抽象的平等」の状態である。しかしこの「抽象的平等」は、市民社会における労働者階級の貧困を隠蔽し、市民階級の支配を正当化する機能を持つ。マルクーゼは、「肯定的文化」が叶える幸福は結局仮象であるにもかかわらず、労働者がその「仮象の幸福」に魂の安寧を求めながら日々の労働に従事すると考え、「肯定的文化」を批判する。次に労働国家の「英雄文化」とは、ユンガーの労働国家論の中核にある議論であり、本書が「肯定的文化の英雄的形態」のことを指してそう呼ぶ言葉である。それは、肯定的文化同様労働の苦痛や苦悩を麻痺させる機能をもつが、市民文化の芸術による仮象の幸福ではなく、民族や国家に奉仕する労働者の偉大さを喚起することによって労働者を統制する。マルクーゼは、これらの「肯定的文化」や「英雄文化」による管理・統制から労働者を解放するために、対象との戯れを重視する新しい文化の可能性を構想する。それは、所与の現実を超える「空想」の力で、対象との偶然的な出会いを果たし、そして対象との戯れに没頭するなかで「幸福」が成就しさらに感覚的・身体的な「快楽」に結びついていく、そのような文化の可能性である。馬渡は、マルクーゼが「美の仮象の身体化」、「享楽の手段としての物化」を擁護するという形で、「幸福」や「快楽」が現出する身体の物化を提起したことが「遊び」論の深化をもたらしたと指摘する。すなわちマルクーゼは、市民社会の精神的文化と禁欲的労働の分

断を身体的快楽の次元で統合し、生産力化した文化とは異なる形で「遊び」を復活させることを構想したというのである。

第 6 章は、1940 年代におけるテクノロジー論への傾斜がマルクーゼ自身のそれまでの労働論とどのように関係するのかを考察する。マルクーゼは、テクノロジーを生産テクノロジーとみなす。生産テクノロジーとは、「個々の目的を達成するための技術を指すだけでなく、産業社会を編成し、その社会で生きる人々の行動や思想を制御する」（馬渡 2025a: 164）社会的な過程でもある。生産テクノロジーが社会的な過程である以上、文化論的なアプローチだけでなく、社会科学的なアプローチが要請される。マルクーゼが論文「現代テクノロジーの社会的意義」（1941 年）で、労働者の管理という 1930 年代後半の論点を、文化による管理ではなくテクノロジーによる管理を通して考察したのは、そのためである。馬渡によれば、1940 年代初頭のマルクーゼが生産テクノロジーの発展と普及に新たな政治体制（テクノクラシー体制）の成立の契機があるとみなしたことは、1930 年代の哲学的思索や文化批判的思索とは異なる政治社会批判的な現代社会論の出発点である。そしてそれはまた、1960 年代に噴出するテクノクラシー批判の伏流の一つなのである。馬渡は、マルクーゼのテクノロジー批判・テクノクラシー批判を「個人主義的合理性」から「技術的合理性」への変化、「旧い即事実性」から「新しい即事実性」への変化、「製作本能に基づく職人的労働」と「科学的管理法に基づく職業訓練」の対比、そして（技術的）合理性と非合理性の対比に即して再構成する。馬渡はその一方で、マルクーゼがテクノクラシー体制からの解放の可能性もまたテクノロジーによる労働時間の短縮と自由時間の増加に求めていることを明らかにし、マルクーゼがテクノロジーに対して両義的な態度をとっていると指摘する。

第 7 章は、1940 年代中盤のドイツ・テクノクラシー体制の内実について、マルクーゼがどのように分析したのかを検討する。マルクーゼはナチス・ドイツの政治構造・経済構造とそれを基に展開する労働者の管理・統制をどう捉えていたのか。この問いに取り組むために本章で参照されるのは、論文「国民社会主義下の国家と個人」（1942 年）、およびアメリカ政府機関 OSS（Office of Strategic Services）でのレポートである。後者は 2013 年に『ナチス・ドイツの秘密レポート』として商業出版され、2019 年には一部邦訳で刊行されてもいるが、わが国での紹介は十分に進んでいるとは言えない。これらの資料は、本章の問いに取り組むために参照することのできるほぼ唯一の資料であり、研究史上貴重な資料であるというだけでなく、これまで謎に包まれたままだった『理性と革命』（1941 年）から『エロスと文明』（1955 年）に至るまでのマルクーゼの思索を跡付ける資料としても重要である。馬渡は、これらの資料に基づき、マルクーゼにおけるドイツ・テクノクラシー体制批判を再構成していく。それによって馬渡は、マルクーゼが国民社会主義の政治構造を（１）党と国家の全体主義的アマルガム、（２）無定形性、（３）国家機械という表現によって特徴づけていること、また彼がその経済構造を（１）ドイツ・テクノクラートの勃興、（２）プロイセン一掃の過程、（３）テクノクラート層の出現、（４）テクノクラートの「中立性」という表現によって特徴づけていることを明らかにする。さらに、このような政治・経済権力の複合体による労働者の統制が、（１）効率性・生産性の追求に基づき、（２）労働組合の統制から、（３）衝動や能力の統

制、（４）余暇や私生活の統制にまで及び、自分自身との「戯れ」が不可能になっているというマルクーゼの分析が明らかになる。馬渡は前章と本章での議論を踏まえて、マルクーゼのテクノロジー批判とテクノクラシー批判には、アメリカとナチス・ドイツに共通するテクノクラシー体制の根本的なあり方を批判する意図が込められていること、ただし民主主義制度に支えられていたアメリカの政治構造と違いナチス・ドイツの政治・経済構造は生産性・効率性追求の極点として位置づけられることを指摘する。マルクーゼは、このような生産性の桎梏を解体し自己との「戯れ」の契機を確保する構想をいかに打ち出すのだろうか。この問いに取り組むことが次章の課題である。

第 8 章は、1950 年代以降のオートメーション論を再構成することで、「生産性」概念を批判する。馬渡によれば、マルクーゼを「生産力」決定論者とみなして批判する山之内靖・平田清明・高島善哉・良知力らにせよ、あるいはマルクーゼと同様にオートメーション・テクノロジーの意義を積極的に評価していた芝田進午にせよ、マルクーゼの議論を一面的に理解してしまっている。つまり山之内・平田・高島・良知らは、「生産力」における人間的側面、主体的側面を評価するあまり、マルクーゼの強くテクノロジー依存的な議論に対して消極的な評価しか与えることができなかった。その一方で、オートメーション・テクノロジーの普及による労働の変容を擁護した芝田も「生産性」概念や「労働道徳」を批判することができなかった。それに対して馬渡は、マルクーゼがオートメーション・テクノロジーを積極的に評価し、テクノロジーを活かすために「生産性」概念や「労働道徳」の相対化を試みている点に光を当てることで、マルクーゼが素朴な技術決定論に終わらない議論を展開していることを明らかにしようとする。馬渡はまず、マルクーゼの論文「自由の領域と必然の領域」（1969 年）を素材に、マルクーゼが「自由の領域」と「必然の領域」というマルクスの区別を踏襲しながら、オートメーション・テクノロジーがもたらす「必然の領域における自由」に解放のポテンシャルを見出していることを確認する。「必然の領域」とは、「人間が自然との物質代謝を通じて、生活に必要な諸物財を生み出す労働がおこなわれる領域」（馬渡 2025a: 226）である。平田清明はマルクスとともに、この「必然の領域」の彼方に「自由の領域」がありそこでのみ人間の真の自由が可能であると考え、マルクーゼを批判する。それに対して馬渡は、平田清明のマルクーゼ批判に反批判するという形で、マルクーゼがなぜオートメーション・テクノロジーの普及に期待をかけたのかを再構成していく。そこで注目に値するのは、オートメーション・テクノロジーの普及が「触媒」となって「生産性」信仰と「労働道徳」を解体し、新しい労働と生活をもたらすというマルクーゼの認識である。馬渡によれば、「触媒」というのは化学用語としては化学反応の速度を上昇させる物質のことであるが、マルクーゼがこの言葉を用いるのは、『一次元的人間』（1964 年）のなかでオートメーション・テクノロジーを積極的に評価する文脈においてである。オートメーション・テクノロジーの「触媒」機能とは、「必然の領域」における自由時間増加の速度を加速させることであり、それによって「必然の領域」における労働形態が変化し「実験」「発明」「監視」といった科学労働になり、「労働と遊びの一致」がもたらされるというのがマルクーゼの主張であると馬渡は整理する。馬渡によれば、オートメーション・テクノロジーの「触媒」による「労働と遊びの一致」

というマルクーゼの主張は、対象との戯れや対象への没頭という 1930 年代の「遊び」的労働のモチーフを、（オートメーションによる必然の領域における労働時間の減少と自由の領域における自己実現という 1950 年代の認識を修正しつつ）1960 年代における科学技術の発展に応じて展開し直したものと言うことができる。このようにして、マルクーゼにおける 1950 年代以降のオートメーション論は、1930 年代の労働論からの理論展開の中に位置づけることができる。

終章では、本書の結論および今後の研究の課題と展望について述べられる。「テクノロジー批判・管理社会批判者としてのマルクーゼ」、「生産力主義者としてのマルクーゼ」、「エロス解放論者としてのマルクーゼ」といったように、これまでさまざまなマルクーゼ像がえがき出されてきたが、本書を通じて馬渡がえがき出してきたのは、それらとは違った独自のマルクーゼ像である。それは、「近代科学技術を人間の労働過程との関係を踏まえたうえで社会内にいかに編成していくか、『生産性』の隘路を避けつつ、その展望をもたらす思想家」（馬渡 2025a: 257）としてのマルクーゼ像である。馬渡は、このようなマルクーゼ像がもたらすインプリケーションを、「労働の負担性とその超克」、「必然の労働と自由の労働」、「テクノロジーの両義性」、「遊びの復権」、「現代の労働をめぐる状況への示唆」、「『持続可能な労働』の可能性」に分けて考察している。

2–2　「オートメーション・ユートピア」の可能性の中心としての「科学労働」

以上、本書の内容要約を通じて、マルクーゼにおける「オートメーション・ユートピア」の構想がいかに具体化されてきたのかを見てきた。1930 年代初頭の「生命活動としての労働」と「遊び」をめぐる議論は、30 年代中盤以降、マルクーゼが生産力化した「肯定的文化」や「英雄文化」に対する批判を展開するなかで、対象との戯れを重視する新しい文化の構想をもたらした。他方、1940 年代に入ると、マルクーゼはテクノロジーによる労働者の管理に注目するようになり、30 年代までの哲学的・文化的思索からは距離を取るようになった。マルクーゼは生産テクノロジーの普及がもたらしたテクノクラシー体制には批判的に対峙しつつも、そうしたテクノクラシー体制からの解放のポテンシャルもまたオートメーション・テクノロジーの普及による「必然の領域における自由」に見出していく。その後、1950 年代から 60 年代にかけて、マルクーゼは「生産性」批判を展開するなかで、オートメーション・テクノロジーの「触媒」機能に注目するようになった。つまり、オートメーション・テクノロジーの普及が「触媒」となって「労働と遊びの一致」がもたらされるという可能性を、オートメーション・ユートピアとして提示するに至ったのである。そして、このオートメーション・ユートピアの構想の中心に位置するのが、「科学労働」という形態なのである。「科学労働」というのは、オートメーション・テクノロジーの「触媒」機能により「必然の領域」にもたらされる自由の労働、すなわち「対象との戯れ、対象への没頭という遊び的労働」（馬渡 2025a: 260）のことである。このような「科学労働」ということで想定されているのは、生産者としての肉体労働に従事することではなく、「監視者」、「発明者」、「実験者」として科学法則の発見や新しい装置設計に従事することである（馬渡 2025a: 224, 226-7, 253）。

こうした、科学労働をめぐる馬渡の議論は、批判的社会理論における労働の問題を再考す

る上でも特に有益な示唆を含む。つまり、ホルクハイマーとプロレタリアートの「微妙な距離感」もあり、フランクフルト学派第一世代の労働論は存在感が薄いと言われるなかで、馬渡が「文化産業論と異なる形での、労働と文化の問題意識に基づく社会批判の可能性」（馬渡 2025a: 121）を提示したことは、そうした「微妙な距離感」を埋めていく上で大きな意義があるに違いない。

以上を踏まえて、以下では本書の内容に対する評価を提示していく。

3　オートメーション・ユートピアの可能性と限界（1）——科学労働という視点

3–1　「必然の領域」の可能性

本節ではまず馬渡のオートメーション論を簡単に確認した上で、それらが現代の社会学や理論研究にとって有する意義を提示する。これは技術楽観論でも技術悲観論でもないオートメーションの第三の道を「労働と遊びの一致」として描き出す点、これによりオートメーション論が陥りがちな「必然の領域／自由の領域」の二項対立を超えた可能性を提示する点、現代の技術発展に伴い現実化しつつあるオートメーションという状況に照らし合わせて、この必然の領域の可能性を再検討する道筋を提示している点の 3 点にある。

既に述べたとおり、本書の白眉は「労働と遊びの一致」の具体的な条件として、オートメーションという生産の次元に注目した上で、その解放的機能がいかに構想されていたのかという理路を明らかにしたことにある。

馬渡によればマルクーゼにとってのオートメーションの重要性の理路は、以下のように要約できる。まず 50 年代のマルクーゼの立場としては、全面的なオートメーションが可処分時間を増やし、人間の快楽と自由を保障するというポジティブな見方が提示される。そしてそのためには、生産性や「労働道徳」という思想によってもたらされる労働強化や、本来増えたはずの可処分時間が労働力の再生産のためにのみ費やされるといった事態を解体することが必要である、という立場が示される。他方、『一次元的人間』など 60 年代のマルクーゼの立場は、オートメーションがプロレタリアの肉体・精神を管理しその一部として組み込むことで彼らを弱体化させるというテクノクラシー的な観点からの批判も含みつつ、物象化の解体という期待も寄せる。すなわち、オートメーションの進展による労働形態の変化（科学労働）および可処分時間の増加を通じて、物象化が克服されるという見通しにも向かう。かくしてマルクーゼはオートメーション・テクノロジーの「触媒」的機能の指摘を通じて、必需品生産に代表される「必然の領域」の彼方に、対象との戯れ・遊びとしての労働の行われる「真の自由の領域」を措定するのではなく、必然の領域の中で自由の労働を行う可能性を指摘するのである（以上、馬渡 2025a: 232-60）。馬渡の議論の重要性は、この思想的展開を「触媒」という概念を通じて明らかにしたことにある。

以上の議論を受けて、マルクーゼのオートメーション論の特徴は以下の 3 点に要約されている。

（一）オートメーションによる可処分時間の増加と労働時間の短縮を目指していたこと。

（二）「生産性」や道具化した「労働道徳」が可処分時間の増加を阻害していると認識していたこと。

（三）オートメーションそのものは労働者の精神や欲動をも管理するが、労働を質的に変化させる「触媒」であり、「物象化」を克服する鍵であるとみなしていたこと。（馬渡 2025a: 254）

さて、マルクーゼ研究史の中での本書の意義は、２章でも触れたように旧来のマルクーゼ研究が閑却してきた「非-1968 年のマルクーゼ」を描くにあたり、労働・文化・遊び・管理社会をめぐる議論を再検討した上で生産力論を再定式化した点にある。以下ではこの議論が現代の社会学や理論研究といったものに対して有する意義を検討する。

まずこうしたマルクーゼ解釈は通俗的な技術楽観論・技術悲観論的な議論へのオルタナティブを提供してくれる。すなわち、昨今だと AI 関連の議論でしばしば聞かれるような「機械化の発展などに見られる生産力の向上は人間を労働から解放するか、それとも失業などにより更なる苦境に陥れるのか」という二項対立である。

技術悲観論に対する距離は既に述べておいたオートメーションへの積極的評価ですぐに理解できるだろうが、技術楽観論についてはどうか。まずマルクーゼの発想は、通俗的なオートメーションへの期待、つまりオートメーションが現行の資本主義社会で完成することで人間は労働から解放される、という楽観的な像とは徹底的に異なる。このような発想は物象化や管理といった問題系を閑却している。本書の立場からすれば、マルクーゼにおいてオートメーションはあくまでユートピアであり、資本主義社会において実現されているそれは、いわばポスト資本主義社会の新たな社会編成の先取りのはずである[3]。

そもそもマルクーゼにおいてオートメーションは人間を労働そのものからではなく、疎外された労働から解放するものであり、これにより「対象と戯れる科学労働の実現に基づく、労働と遊びの一致」（馬渡 2025a: 257）が可能になるというビジョンも意味を持つ。そしてマルクーゼは労働が完全に不要となり、「快楽」のみに満ち溢れた社会を実現させれば良いと考えていたわけでもない。馬渡が指摘する通り、その問題関心は生産性に依拠する社会規範・社会制度による疎外された労働を廃棄することにあった。

労働の排除ではなく、人間を労働のひとつの道具にしようとする組織の排除」（EC155=140）があくまで彼の主な目的なのであり、労働自体の必然性は認識している。「生産性」の追求に基づいて過剰な労働時間が「人間の発達」を妨げてしまうことをマルクーゼは問題にしているのである。（馬渡 2025a: 236）

以上より、資本主義の中でオートメーションへと進むように見える諸傾向をオートメーション・ユートピアという理念そのものと取り違えることなく、あくまでポスト資本主義的社会の別様の労働を先取りし、かつ「触媒」としてそちらへの移行を促す、という二つの意味でオートメーションの解放的潜勢力を捉える姿勢こそ、マルクーゼの特徴ということにな

るだろう。つまりマルクーゼは技術楽観論でも技術悲観論でもなく、オートメーションが物象化の危険を持ちながらも解放的な機能を有する、という第三の道、つまり「労働における自由」という道を、「労働と遊びの一致」を可能にするという理路により提示していることになる。

エドワード・グランターも同様の議論を行っており、こうしたマルクーゼの理路を以下のように表現している。すなわち、マルクーゼは労働からの自由ではなく、労働における自由という形で、自由の領域と必然の領域の区別がなくなるという意味での「労働の終焉」——正確には疎外労働の終焉——を語っている。そしてこの理路を根拠づける、あるいは強化するものとして、当時の生産圏の変化（オートメーション化など）への合理的観察と、ロマン主義的な「真の欲求」「新たな感性」によるユートピアの実現という両極とを結びつけているのである（Granter 2007:89-91）。しかし馬渡の議論はこの理路を労働、遊びという二極について丁寧に描き出した上で、より適切な解釈を提示しており、この点でもやはり優れたものである[4]。

また本書は現代のオートメーション論にとっても貢献をなすものである。例えばアーロン・ベナナフの議論によれば、既存のオートメーション言説は①労働者が高度な機械に置き換えられる「技術的失業」が増大し、②この置き換えが人間労働の完全な代替としてのオートメーション社会への兆候であり、③社会で生きる以上大多数の人にとって労働は不可避なのだからオートメーションは悪夢でもあり、④大量失業を回避するにはユニヴァーサル・ベーシック・インカムを導入し労働と収入の関係を断たねばならないという主張を特徴とする（Benanav 2020=2022: 30）。そしてベナナフ自身は、こうした議論をデータに基づいて批判した上で、オートメーション言説における創造・自由などに彩られたユートピア的性格をもつ「ポスト希少性社会」は、テクノロジーそのものよりも、集団の再生産のために必要な労働を議論により適切に配分して共同労働を発展させることにより可能となるのであり、それゆえ生産を取り戻すための社会闘争が必要だとしている（Benanav 2020=2022: 160-92）。

しかしベナナフの議論も、「必然性の領域が保障されれば……誰もが自由に自らの個性を発揮できる」（Benanav 2020=2022: 177）という表現に示されるように、依然として必然の領域と自由な領域とを二元論的に区分し、自由の領域にのみ創造性・自発性を認めている側面がある（Benanav 2020=2022: 180-1）。これに対して、本書で提示された 60 年代のマルクーゼの思想、すなわち必然の領域において自由が可能になる——そしてその「触媒」としてのオートメーション——という発想は、異なる視点からオートメーションのポテンシャルを提示しているのであり、現行の議論に再検討を促す有意義な理論的資源ということになる[5]。

これを受けて第三に、本書の中で指摘される科学労働のポテンシャルが——原理的にはあるとした場合——今日どれほど発揮されているのか、という観点から、今一度「必然の領域」の可能性を経験的に再検証するという今後の研究の発展可能性もまた示唆されていると言える。馬渡自身も指摘している通り、これは労働論や環境論（科学と公害、エコロジー等）との関係で進められていくことだろう（馬渡 2025a: 264）。

特にこれは、オートメーション概念があくまで工業生産という時代背景の中で考えられて

いたマルクーゼの時代とは異なる、現代的文脈において再検討される必要があると思われる。例えばネグリ＝ハートは工業経済から情報経済へ、フォーディズムからポスト・フォーディズムへという歴史的変化により新たに出現した経済的パラダイムにおける労働を非物質的労働と呼ぶ。「物質的生産――たとえば車やテレビ、衣服、食料品などの生産――は社会的生活手段を作り出す。..... これに対して非物質的生産――アイディア、イメージ、知識、コミュニケーション、協働、情動的関係などの生産――は社会的生活手段ではなく、おおむね社会的生そのものを創り出す。非物質的生産は生政治的なものなのだ」（Hardt and Negri 2004=2005: 242 傍点は原文）。こうした時代の中でマルクーゼのオートメーション論が果たして同じ意味を持ちうるのか、ということはやはり再検討が必要だろう。

なお現時点の評者としては、このような可能性はそれほど積極的に発揮されておらず、その有効性を示すにはもう一歩踏み込んで検討する必要があると思われる。

この可能性の問題は大きく分けて二つの論点に分けられる。第一にオートメーションが依然として階級社会を維持する機能を果たしているように見える状況である。例えばハリー・ブレイヴァマンにならえば、テイラー主義的な科学的管理法の導入によって「構想と実行の分離」が進み、雇用形態・労働形態が二極化するとともに大半の労働者において熟練労働や生産過程の統制能力が解体された（Braverman 1974=1978）。そして小松史朗が指摘するように、これは現代的な形態をとってさらに進展しているようにも思われる。つまりポスト・フォーディズムの中でマルクスやブレイヴァマンの指摘した事態が精神労働においても進展しており、管理的労働、技術的労働、サービス労働においても機械や AI による代替が進み、経済状況の悪化やそれをめぐる法的・政治的規制の緩和の中で、労働者は一層努力を強いられるだけでなく、階層内の分断が進んでいる、という見方が可能なのである（小松 2021: 811-2）。

第二に、オートメーションが技術的には実現しつつある現代において、科学労働の自発性や創造性が現実のものとなっているかどうか、という問題である。例えば日本だと労働の自発性にかんしてはトヨティズムの小集団活動に関する議論が有名である。野村正實の規定ではトヨティズムとは①現場監督者が原価低減・利益増大のための改善活動の主体となり、②集団間の競争を駆り立てるために仕事の早さに関する「基準時間概念」が設定され、③クラブ活動、寮・社宅などにより従業員同士、従業員と上司の間に濃密な人間関係を築くことで家族を含めて労働者を包摂する、という特徴のある「改善の仕組みと濃密な人間関係をもったテイラー主義」である（野村 1993: 204-17）。そして特に①に関連する主題として、労働者の小集団による自主的な提案活動である QC サークル活動や、改善活動としての「創意くふう提案」は、労働者が工場内の作業過程の改善へ主体的に取り組む「自主活動」としてしばしば評価されてきた。しかしこれらはあくまで生産性向上にかかわる範囲での「能力形成」であるとともに、サークル中心の集団責任原則、相互監視体制、金銭評価・人事評価といったかたちで資本側が労働者の動機づけを管理する「暗黙の強制」の仕組みであった（猿田 1998）。このように小集団活動などは、本来の労働者の知的創造性や自発性、自律性の発揮とは異なる労務管理としての性格を有していたのである。

また昨今の「〈やりがい〉の搾取」論も、同じく問題含みの自発性の問題を扱ってきた。本

田由紀によれば、これは「夢」「成長」などを目指す若い労働者の自発的な自己実現をたくみに調達することで、エネルギーや時間といった面で労働の強度を増し、資本の側が利益を得る論理を指摘するものである（本田 2011）。あるいは労働者の側の合理性からこの自発性の問題を扱うものもある。松永伸太朗の研究は、一般に創造性を発揮する職業とみなされるアニメーターが、低賃金・長時間といった劣悪な労働条件を受け入れてしまう中で作用しているアニメーター自身の合理性や職業規範を明らかにしている（松永 2017）。以上のように、労働者の自発性・創造性が十全かつ健全に発揮されるべきはずが、現実としては搾取の一契機へと転化してしまっている事情が問題化され、議論されてきているのであり、これらを無視することはできない。

さらに、より科学労働という論点に迫る意味では、昨今のデジタル技術の進展を受けた研究に目を向けることもできる。例えば三家本里実はブレイヴァマン・テーゼを現代で実証的に検証するために、「団結」「生産に関する知」という意味での労働過程に対する労働者の「自律性」と、資本家のマネジメントの一環として付与された《自律性》という対比のもと、今日の IT 産業における労働者を研究している。そこではプロジェクトの人員や納期、業務量など、あらかじめ資本により規定された部分については関与し得ずその全体像も把握できない（「構想」）が、現場レベルの業務には決定権がある（「実行」）ことで、労働者はあたかも「自律的」であるかのように認識し、これにより実際に自発性や主体性のある行動が調達される、という《自律性》の創出過程が提示されている。この中では、一般に「自律性」をもたらすとされる裁量労働制や AI なども、実際には《自律性》の創出に寄与していると論じられている（三家本 2024）。

こうしたデジタル時代、AI 時代における労働の実質的包摂はまさに今研究が進んでいるトピックである。例えばモーリッツ・アルテンリートは「デジタル・テイラー主義」という概念を提示することで、非物質的労働についてネグリらとは異なる視角から分析を提示している。そこで注目されるのはネグリらの念頭にあるグローバルノースの高度人材のネットワークではなく、「デジタル工場」と呼ばれるような古い労働資源の再編である。つまり旧来の工場が、デジタル技術により物理的・空間的な限界を越え、配送センターやリモート勤務のリビングという異なる姿をとりながら、差異や場所を超えて労働を組織化、分配、管理、再生産する「デジタル工場」へと変貌しており、そこでは依然として創造性から程遠い働き方が存在するのである（Altenried 2022=2024）。このような点を考えても、IT 技術が可能にするとされるオートメーションの実現というものが自発性や創造性をもたらす解放的なものになっていないことは理解できるだろう。

そのため、マルクーゼの想定していた解放的機能からは程遠い現実の視点から、マルクーゼのオートメーション・ユートピア論を再検討する作業や、あるいはマルクーゼの規範的な議論から現代の技術やオートメーションをどのように批判すべきなのか、という道筋を描くことも今後の課題となると言える。

以上のように、馬渡の議論はマルクーゼ解釈として新規性を有する点で学説研究としての意義を有するとともに、マルクーゼの時代よりも機械化・自動化が進展したことでオート

メーションの可能性が高まった現代において技術、労働といった論点を再考する上で、貴重な手掛かりを提供する理論研究としての意義をも有している。しかし、その歴史的変化の中でも依然としてオートメーションの解放的機能が働いていないように見える否定的な現状に対して、マルクーゼの立場に依拠した場合どう答えられるのか、という点についての馬渡の見解が不明であるという問題は残っているのである。

3–2　マルクーゼにおける「主体」の問題

次に、フランクフルト学派の学説研究という観点から馬渡の議論を検討したい。特に評者が注目するのはこれまでの先行研究でも強く関心が向けられてきた革命の「主体」という論点である。先取りすると、フランクフルト学派第一世代が問題とした主体と客体（自然）との支配関係を解体し和解させる道筋について、馬渡の論考でもなお不明瞭な点が残ること、そして科学労働者という形でイメージを与えられた革命の主体が連帯や実践に至る理路が不明瞭であることの２点が問題だと考えられる。

まず先行研究の例として、この主体という論点に関する一般的解釈と思われる徳永恂の説明を引いてみる。徳永はフロイトの「本能の抑圧→支配のための労働（レイバー）→抑圧的文明」というコースに対置する形で、マルクーゼのオプティミスティックな「本能の解放→社会のための活動（アクティヴィティ）→抑圧なき文明」というコースを描いた上で、その終着駅として「労働と遊びの一致」というユートピアがある、とする。そして、以下のように述べる。

> しかしそういうユートピアへの移行過程については、マルクーゼは生産のオートメーション化による労働時間の短縮に期待を寄せ、疎外の激化が疎外そのものを止揚する条件を生み出すだろうという弁証法の客観主義的解釈を呈示するに止っている。おそらくこういう楽観的な期待が失望に代ることによって、60 年代のマルクーゼは、周知の、いちじるしく主観主義に傾斜した、ラディカルな路線に反転していくのであろう。ここではユートピアはまだ美的領域に止まっており、現実の政治的日程に乗ってはいない。（徳永 2002: 20-1）

つまり生産、労働という客観的次元での歴史的変化に革命の契機を見出す立場から、管理社会化の全面化によりそうした旧来の労働者への期待が消失し、「偉大なる拒絶」のように体制外へと抜け出る主観的拒否へ向かう、主観主義的あるいは実存主義的な転回が認められる、というわけだ（徳永 1974: 225）。

しかし馬渡の提示したマルクーゼのオートメーション・ユートピアは、そのような解釈にはとどまらず、オートメーションと「遊び」を現実的な拠り所として、「新しい感性」の担い手としての科学労働者の可能性を提示するものであった。馬渡の議論によれば、マルクーゼは疎外労働の対概念としての「遊び」概念から生産性信仰を批判し、オートメーションにより産み出された事物を用いた実験や「遊び」という形で再定式化することで、私的所有や道具的な関わり方と異なる、「対象と自由に戯れるための」「新しい感性」（馬渡 2025a: 228）という解放の構想を提示した。こうした馬渡の議論は、先行研究も指摘してきた主体の「新しい感性」という論点について、「近代科学技術を人間の労働過程との関係を踏まえたうえで社

会内にいかに編成していくか」（馬渡 2025a: 257）という観点から再評価する点でやはり新規性がある。

しかし馬渡の理路には不明瞭な点が大きく分けて二つ残っている。まず主体と自然との関わりという論点である。馬渡の描くモデルでは、マルクーゼはあくまで自然との関わりを労働モデル、つまり「自然とのかかわりのなかで、自然を取り込み、領有することで、人間は自己確証を得、世界の一部になる」（馬渡 2025a: 94）という仕方で捉えていることになると思われる。この時どれほど遊びの解放的な機能が重要視されていても、「対象の性質に準じるよりも、遊ぶ者の意志が優先される」（馬渡 2025a: 95）という表現に見られるとおり、あくまで主体の側の態度についての言明となる。この場合、「遊び」概念を用いることでテクノロジーのもつ支配的性格、例えば環境破壊をもたらすような性格を完全に解体できているのか、疑問が残る。

こうした立場の問題性は、例えばアドルノが主張した「人間と自然との和解」の理路との距離により明確になるように思われる。もちろんアドルノの議論にも、マルクーゼの立場と類似する部分は散見される [6]。例えば以下のような言明である。

> 労働過程の合理化なども、もっぱら「生産性」を目標とする代わりに、労働そのものを人間にふさわしい姿にすることや、持って生まれた欲望を充足したり洗練したりすることや、人間の目的のために人間の手を加える場合にも、自然とその質的多様性を保存することなどに振り向けられてよいはずである。（Adorno 1962=2012: 323-4）

しかしアドルノの議論は「客観の優位」というキーワードに見られるとおり、主体に捉え切ることのできない対象の側の契機（非同一性）を重要視し、自然支配を反省する点に特徴がある。そして自然を他者として支配する道具的理性を乗り越えること、あるいは岩熊典乃が言うように「理性にとって半ば永遠に他者であらざるをえない自然、おのれの射程の圏外にある自然へとおのれを開く作業」としての「緊張に満ちた自省の歩み」が要請されるのである（岩熊 2012: 63-4）。馬渡の解釈では、こうした主体と客体、遊びと自省、「新しい感性」と理性といった論点をめぐる自然支配の問題は解決されていないように思われる [7]。

第二に問題となるのは、こうした「新しい感性」の担い手となる変革主体という論点である。旧来のマルクーゼ像では変革主体として期待を寄せられていたのは、管理社会に対してマージナルで体制外にある、マイノリティや学生といった存在であった。しかし本書の議論を追っていると、科学労働者という形で、再びプロレタリアという主体が問題になっているようにも思われる。

このような「主体」観の相違はいかにして解消されるのか。つまり科学労働者もまた創造的集団として、カウンターカルチャー的な主体と一定程度類似した形で変革の可能性を持つとされるのか、それとも異なる理路の中で変革の可能性を託されているのか。この点は馬渡の議論では明らかになっていない。

馬渡の議論に即した形で表現すると、科学労働における自然との「遊び」という契機を経た科学労働者は、いかにして物象化を解体する連帯、実践へと向かうのか、ということである。

換言すれば古典的なマルクス主義の議論、つまり単なる労働日の削減によって抑圧的労働の廃絶へ向かう連帯が組織されるという筋道なのか、それとも科学労働やそれに由来する「新たな感性」が内在的に、民主的・解放的な共同性を創出するのかどうか、ということである。

こうした本書の議論にはマルクーゼ自身が「循環論法」（Marcuse 1967=1968: 42）と表現し解決できなかったと認める問題がそのまま表れているようにも思われる。それが革命の主体性と客観的条件との論理的順序という問題である。本書の議論に沿ってこれを表現すれば、マルクーゼはオートメーション・ユートピアというかたちで旧来の資本主義的生産様式を打破することが新たな人間的要求、新たな感性をもたらすとも主張するとともに、そのような新たな人間的要求を持つことが生産様式を変革する主体の確立を促すと主張しているようにも見えるわけだが、本書で用いられている触媒という表現で、果たしてこの循環の問題は解決されているのだろうか[8]。この問題は上述した対立、すなわち生産・労働の客観的次元に期待する客観主義か「偉大なる拒絶」の主観主義かという対立ともつながるものである。この点についてエロス論なども踏まえながら、「新たな欲求」「新たな感性」が具体的にどのような実践として社会的に展開され、社会変革に至るのかという理路をより明確にすることで、既存の解釈を克服しようとする本書の企図はより完全なものとなるだろう。

以上のように、馬渡の提示するマルクーゼ解釈は、オートメーションと遊びという鍵概念のもと「新しい感性」の担い手としての科学労働者の可能性を提示したことで意義を有するものである。しかしこの主体をめぐる馬渡の議論には、自然支配と遊びの解放的機能、連帯と実践という２つの論点について不明瞭な点が残るのである。

しかしこのように議論に不十分な点があるものの、現代批判理論を参照することで、この限界を乗り越える可能性もまた見出しうると評者は考える。次章では、科学労働者の連帯という論点からこの点について論じることとする。

4　オートメーション・ユートピアの可能性と限界（２）——科学労働者と「連帯」の問題

本章では特に、科学労働における自然との「遊び」という契機を経た労働者の連帯をどう見るかという問題に取り組みたい。たとえば労働社会学者の中根多惠は、必ずしも労働者というカテゴリーに自らのアイデンティティのよりどころを求めることのない芸術家（音楽家）による連帯がいかにして可能なのかという問題を提起する（中根 2023）。本書の終章で馬渡が述べるように、マルクーゼの「労働と遊び」論を具体的な社会構想に結実させるための手がかりが、「管理＝行政の契機を排除したうえでのフーリエ的な遊び的労働の共同体にある」（馬渡 2025a: 264）のだとすれば、芸術家による連帯の可能性だけでなく、「科学者としての労働者」「労働者としての科学者」にとって連帯がいかにして可能なのかもまた問われなければならないだろう。

しかし、科学労働者の連帯という問題を考察する上で、本書の言う「科学労働」の概念には限界もある。たしかに科学労働は、自然や物質的な素材という対象から自由な遊び的労働であるという点では、通常の労働とは違っている。だが科学労働もそうした対象とのかかわ

りを戯れや没頭という形で保持し続けている以上、人間が対象にかかわるという点では労働と同じ行為なのである（馬渡 2025a: 95）。さらに問題なのは、科学労働の対象が労働と同様に自然や物質的な素材に限定されたままであるという点である。科学労働が、このように人間と自然とのかかわりに限定されたままであるとするならば、人間と人間とのかかわり、言い換えれば科学労働者の連帯という側面をどう見ればよいのだろうか。馬渡が述べるように、「ユートピアを永続させる具体的な制度設計の展望を明確に示しきれなかった点にマルクーゼの限界を求めることができる」（馬渡 2025a: 264）のだとすれば、その原因の一端は、このように「科学労働」の概念が狭いこと、つまりそれが人間と自然とのかかわりに限定されており、科学労働者の連帯や共同体の構想に結びつけることができなかった点にも求めることができるのではないだろうか。したがって、こうしたマルクーゼの限界を乗り越えていくためには、マルクーゼが見ることがかなわなかった科学労働者の連帯という側面に光を当てることができるような理論が必要なのである。

こうした問題にアプローチするための有力な理論としては、例えば、ユルゲン・ハーバーマス以降の「批判理論」を代表する社会理論家アクセル・ホネットの承認論を挙げることができる。ホネットは、初期の代表作『承認をめぐる闘争』（Honneth [1992] 2003=2014）で、人間の自己実現に不可欠な社会的承認の諸形式について論じ、そのような承認を可能にする人間と人間とのかかわり方を「愛」、「法（権利）」、「連帯」という形で具体化した。ホネットの承認論、特に「連帯」の部分に関する議論は、本書が再構成するマルクーゼの科学労働論を具体的な制度設計への展望に結びつけていく上で参照に値する。

以下ではまず、批判的社会理論と労働の関係をめぐる学説史を振り返りながら、なぜホネットの承認論が参照されるべきなのかを明らかにする。評者の見るところ、マルクーゼの「生産性」批判を再構成する馬渡の議論は、「科学労働」という視点の提示には成功しているものの、そうした科学労働者自身がいかに「生産性」批判を遂行していくのかをうまく描き出すことができていない。こうした限界を乗り越えるために、ホネットの「連帯」論を参照し、科学労働者の「連帯」という側面に光を当てて見ることで、マルクーゼの「生産性」批判が、市民社会の「業績原則」を問い直す「承認をめぐる闘争」の実践として再構成可能であることを示す。

4–1　「生産性」批判の可能性と限界——ホネットの承認論の視点から

ホネットは、労働が批判的社会理論にとってなくてはならない問題領域を構成していると主張してきた。まずはこの点を確認するために、批判的社会理論と労働の関係がどう展開してきたのかを振り返っておこう。

例えば日暮雅夫は、ホルクハイマーからホネットに至るまでの「フランクフルト学派」の社会理論において、「『労働』論の視点は次第にその中心的な射程から遠ざかって行ったということができる」（日暮 2016: 132）と述べる。ジョルジュ・ルカーチの『歴史と階級意識』においては、労働者階級に資本主義社会の構造を変革する役割が負わされていたが、ホルクハイマーとアドルノの『啓蒙の弁証法』においては、もはや労働に社会変革のポテンシャルは見出されなくなった（日暮 2016: 132）。ユルゲン・ハーバーマスにおいても、労働そのも

のは重要な位置を占めることがなかった。たしかに彼は、1968 年の論文「労働と相互行為」では労働と相互行為を区別し、相互行為にとっての労働の重要性を指摘していた（大河内 2010: 63）。しかしいわゆるコミュニケーション論的転回以降、彼は「生活世界」と「システム」とを二元論的に対置し、労働の領域を市場経済という目的合理的なサブシステムの領域に組み込むことで、結局は労働の領域における解放のポテンシャルを見出すことができなかった（日暮 2016: 133）。ハーバーマスにおいて労働と相互行為が区別されたこと、そしてコミュニケーション論的転回により労働の意義が失われたことは、労働を社会の生産と維持に貢献する力とみなす社会理論が、コミュニケーションの手続きに焦点をあてた社会理論に置き換えられたということを意味する（Celikates et al. 2023: 320-1）。このように、批判的社会理論の展開のなかで次第に労働の問題の存在感が薄くなりつつあったなかで、労働の問題を積極的に取り上げてきたのが、ホネットその人である（Honneth [1992] 2003=[2003] 2014, [2008] 2010=2017, [2011] 2013=2023, 2023=2024）。ホネットは、ハーバーマスにおける「システム」と「生活世界」という二元論的な把握に自らの「承認をめぐる闘争」の構想を対置することで、労働の領域を規範にかかわらない領域としてではなく、むしろ私たちが経済的生産のサブシステムのなかでさまざまなアイデンティティの侵害、尊重欠如の経験をこうむる規範的な空間とみなし、そこで生じる承認をめぐる闘争に解放のポテンシャルを見出すのである（日暮 2016: 133-5）。

ホネットの議論は、彼以降の批判的社会理論の文脈で労働を論じる上で、避けて通ることのできないものとなっている。本書もその例外ではない。馬渡は本書を発表する以前から、ホネットの議論を参照点としてマルクーゼを積極的に評価する仕事に取り組んでおり、本書の議論もその延長線上にあると言うことができる（馬渡 2019）。実際、本書の終章における「現代の労働をめぐる状況への示唆」という項では、ホネットらによるマルクーゼの消極的評価に異議を唱える形で、マルクーゼの「生産性」批判には市民社会の業績原則に対する批判としてのポテンシャルがあり、擁護に値するだろうと論じられる（馬渡 2025a: 261-2）。

評者の見るところ、マルクーゼの「生産性」批判を再構成する馬渡の議論は、一定の成功を収めているものの、その一方で限界もある。たしかに、現代の労働をめぐる状況、特に「効率的な経営を達成することの喜び」を労働者が内面化させられ「生産性」の向上を煽り立てられる状況を批判する際、対象との戯れという形で遊びを保持する「科学労働」という視点は有力な手がかりになるに違いない（馬渡 2025a: 262-3）。しかしながら、こうした「生産性」批判の問題は、この「科学労働」という視点が、規範的に「本来あるべき労働」として「外在的」に提示されることから生じる（馬渡 2025a: 262）。

ここで、現代の批判理論家であるティートゥス・シュタールの議論を参照しつつ、こうした「外在的批判（external critique）」の問題点について確認しておこう。シュタールによれば、「外在的批判」とは、その批判を遂行する際に使用される基準が、いかなる社会的実践からも独立しており、あたかも批判によってはじめて「外部から（from the outside）」導入されるような社会批判の一形式のことである（Stahl 2013: 5-6）。こうした外在的批判には、社会的実践のいかなる記述からも、あるいはどのような特定の観点からも独立しうる基準（例えば

「正義」）を用いることで、さまざまな社会的実践を適切に評価することが可能になるという利点がある一方で、そのように社会的現実からかけ離れた基準にはいかなる正当性があるのかという問題がある（Stahl 2013: 6）。

これと同型の問題が馬渡の再構成するマルクーゼの「生産性」批判に対しても突きつけられるのではないだろうか。つまり、馬渡が述べるように、「科学労働」という「規範的労働概念を前提に労働の現状分析や社会理論的検討を行なう外在的批判」（馬渡 2025a: 262）が棄却されるべきではないのは確かであるとしても、そうした「科学労働」という視点が労働者にとって外部から提示される基準であるかぎり、規範を正当化するという点ではやはり限界があるのではないだろうか。こうした馬渡＝マルクーゼの外在的批判の限界を乗り越えるためには、「科学労働」に従事する労働者自身がいかに「生産性」批判を遂行しているのかを内在的に再構成することで、「科学労働」という規範を正当化する科学労働者の実践をえがき出す必要がある。評者の見るところ、そうした科学労働者による「生産性」批判の可能性は、「連帯」関係のあり方を問い直す「承認をめぐる闘争」の実践に見出されるだろう。

このように、ホネットの労働論との対話は、本書の隠れた主題の一つとなっているのである。そこで次節では、ホネットの「連帯」論を参照して、科学労働者の「連帯」という側面に光を当ててみることで、マルクーゼの「生産性」批判をいかに「承認をめぐる闘争」の実践としてえがき出すことができるのかを検討する。

4–2　「承認をめぐる闘争」としての「生産性」批判

ホネットにおける「連帯」は、「個体化された、（そして自律した）主体のあいだで対称的な価値評価がおこなわれる社会関係」（Honneth [1992] 2003: 209=2014: 174）を意味する。ホネットによれば、近代社会における社会的な価値評価のあり方は、個人化された業績評価という形を取るが、私たちが社会的な価値評価を受けるためには、連帯関係を形成し、そこで自らの業績や能力を社会的に価値のあるものとして承認してもらわなければならない（Honneth [1992] 2003: 196-211=2014: 163-76）。しかし、もしふさわしい価値評価を受けることができなければ、私たちはそうした価値の剥奪に抵抗して、より適切な価値評価を受けることができる連帯関係をめざして「承認をめぐる闘争」に踏み込んでいくのである（Honneth [1992] 2003: 212-29=2014: 177-88）。このように、連帯関係における社会的価値評価の内実は、私たちの「承認をめぐる闘争」の実践にほかならない。しかも、連帯関係における社会的評価のあり方は、私たちの「承認をめぐる闘争」によってつねに問い直される可能性に開かれているのである。ところで、連帯関係における社会的価値評価ということで想定されているのは、労働による業績評価である。つまり、ホネットにとって「連帯」というのは、より具体的には「非親密で職業による身分をめぐって競争するようになる社会関係」（Honneth 2003: 168=2012: 160）のことであり、そこでは個人がどれほどの社会的価値評価を得られるのかは、「産業として組織化された分業体制において一個人として行った業績」（Honneth 2003: 166=2012: 158）によって決定されるというのである。

このように、「連帯」をめぐるホネットの議論を参照することで見えてくるのは、科学労働者と自然との遊びという側面だけではなく、科学労働者の「連帯」というもう一つの側面で

ある。すなわち、通常の労働者だけではなく、科学労働者たちも連帯関係を形成し、そこでの業績評価に晒される存在であるということだ。

それでは、そのような科学労働者の「連帯」のあり方をどうイメージすればよいだろうか。例えば、馬渡が本書第 6 章で言及している「技術者のソビエト」（ソースタイン・ヴェブレン）は、それが「労働者ではなく、また資本家にもよらない、技術者による評議会」の構想であるという点で、一つの有力な参照点となるだろう [9]（馬渡 2025a: 180-1; Öncü 2017）。

あるいは、馬渡が本書第 8 章で言及している環境社会学のパイオニア・飯島伸子も参加した「現代技術史研究会」（以下、現技史研）の会員の活動を振り返るならば、科学労働者の「連帯」のあり方を問い直す「承認をめぐる闘争」の実践について、さらに有力な手がかりを得ることができるのではないだろうか（馬渡 2025a: 265）。この現技史研の会員であった星野芳郎、宇井純、佐伯康治、井上駿、井野博満、松原弘、田中直、猪平進、天笠啓祐、坂田雅子、廣瀬峰夫、後藤政志らの活動を「もの言う技術者たち」という視点から記録したジャーナリスト・平野恵嗣によれば、「会員らは、技術の発展の一翼を担っているという気概をもちながらも、一方で、技術や経済の成長過程で生じた公害や環境破壊にみずからも加担しているのではないかという『加害者性』も強烈に意識していた」（平野 2023: 10）。特に、環境学者でもあった宇井純の活動は注目に値する。というのも、水俣病をはじめとする「多くの公害・環境問題に関わるなかで、環境問題と科学・技術の関係について考え続けてきた」（立石 2011: 13）ことで知られる宇井の活動から浮かび上がってくるのは、社会運動に加わることが必ずしも科学労働者としての業績評価をもたらさないような既存の「業績原則」のあり方について問題提起し、反省をもたらそうとする科学労働者の姿であるからだ [10]。つまり、宇井の活動は、科学労働者としての「生産性」の向上を前提とする「業績原則」を批判する「承認をめぐる闘争」の実践として見ることも可能であり、興味深いのである [11]。

さらに、必ずしも科学労働者の実践というわけではないが、馬渡が「生産性」批判の文脈で取り上げたいくつかの先行研究を、市民社会の「業績原則」を問い直す「承認をめぐる闘争」という視座からあらためて見直すことも可能ではないだろうか。例えば、星加良司（2011）は、障害者を「二級市民」（「完全な市民」の資格を手にしていないという意味）として排除・抑圧する私たちの社会の「互恵性」基準を問い直そうとする。あるいは、今防人（2009）は、障害者運動団体「わっぱの会」の活動を振り返りながら、「コミューンはどこへ行ったのか」と問う。そうした当事者自身による「生産性」批判の試みを、市民社会の「業績原則」を問い直す「承認をめぐる闘争」の実践として読み直す可能性があるのではないだろうか [12]。

このように、マルクーゼの言う「生産性」批判は、市民社会の「業績原則」を問い直す「承認をめぐる闘争」の実践として再構成可能である。マルクーゼの科学労働論を具体的な制度設計に結び付けていくためには、「科学労働」という規範的労働概念を生かしながらも、科学労働者や当事者自身による「生産性」批判の試みとしての「承認をめぐる闘争」から、いかなる新しい連帯関係（遊び的共同体）が生まれてくるのかを探り出していく必要がある。ここにマルクーゼの科学労働論とホネットの承認論が共鳴するポイントがあり、マルクーゼとホネットの対話が継続されていかなければいけない理由がある [13]。

5　結語

以上、馬渡のマルクーゼ論の意義と限界について論じてきた。３章では主にオートメーション・ユートピアと科学労働者という主体の可能性と限界について論じた。馬渡の論じるマルクーゼ像は、古典的な「必然の労働」と「自由の領域」の二項対立について、後者のみを解放と結びつけるのではなく、オートメーションによる技術革新、労働形態の変化によって前者における自由の実現を目指すかたちで再定式化するものであった。他方で、さらなる検討を要する問いとして、これが現代の社会的・技術的変化の中でどのような意味を持ちうるのか、その際の主体のイメージはどのようなものになるのか、といった点も指摘した。次に、４章ではホネットの承認論という現代批判理論の文脈から見た場合、マルクーゼの科学労働論がどのような意義を有するのかを検討した。これにより、馬渡がマルクーゼのアクチュアリティの一つとして述べる「生産性」批判は、まさに市民社会の「業績原則」を問い直す「承認をめぐる闘争」の実践としても再構成可能であると明らかになった。

最後になるが、おそらくここまで論じてきたいくつかの限界、疑問は、おそらく一つの根本的な問題に端を発している。それは、馬渡が提示してきた「非-1968 年のマルクーゼ」と、馬渡があえて距離をとった「1968 年のマルクーゼ」とはいかに交差するのか、という論点である。両者の共通点もあり相互排他的ではないものの、それでもその理路はやはり異なっているはずである。そのため最新の先行研究も追いながら馬渡自身がこの交差を再検討することによって、二つのマルクーゼ像がどのように関係し、互いを補完するのかが、今後提示される必要があるのではないか。換言すれば、「1968 年のマルクーゼ」として組み上げられてきたエロス、エコロジー、主体、革命、ユートピアといった諸契機の連関に、本書で提示された新たな「非-1968 年のマルクーゼ」が有機的に組み込まれることで、より総合的なマルクーゼ像が描かれるのではないだろうか[14]。

付記

本稿は、執筆者二人で全体構想を策定した上で、市川が第 1 章、第 3 章、第 5 章の草稿を、松崎が第 2 章と第 4 章の草稿を作成し、その後再び二人で協議の上、加筆・修正・推敲を行った。

注

1 本稿は、2025 年 5 月 26 日（月）に開催された、東京大学大学院人文社会系研究科社会学研究室社会学談話会（書評会）・社会学演習でのコメントを基にしている。評者らのコメントに対して丁寧な応答をしていただいた馬渡氏、ならびにさまざまな指摘をいただいた参加者のみなさまにも記して感謝申し上げる。

2 本書の刊行は 2025 年であるにもかかわらず、マルクーゼ研究の参照が 2018 年で途絶えており、こうした直近の学説研究の動向が参照されていないのは惜しまれるところである。

3 『ユートピアの終焉』で述べられている通り、オートメーションの完成と資本主義との併存は不可能な事態である。

> いずれにせよ、オートメーションの完成ということは、一方資本主義の限界でもあるということを、ここでわれわれは付け加えておかねばなるまい。既にマルクスが『資本論』以前に洞察して

いたごとく、社会的に必要な労働を完全にオートメーション化することと資本主義の存立とは両立できないのである。……貧困が克服されるや、この傾向は、社会的労働の内容である人間的、非人間的性質の諸可能性を止揚した遊びへと到達する。そしてまたこの傾向は、科学的に形成されてきた生産力に基づく生産的想像力、つまり、自由な人間存在の諸可能性を生産力の発展に応じた諸可能性の基礎の上に打ち立てるという生産的想像力を生み出すのである。このような意味で、技術的諸可能性が抑圧の諸可能性とならないためには、つまり、技術的諸可能性が解放された機能を果たすことができるためには、その技術的可能性が解放された要求によって担われていることが必要なのである。（Marcuse 1967=1968: 10-1）

4 馬渡は、自由の領域と必然の領域の区別の消失ではなく、必然の領域における自由の達成と述べており、こちらの方が適切な表現だと評者は考えている。マルクーゼの主張では、現代でエッセンシャル・ワークと呼ばれるような必然の労働は消滅するわけではない。これは第２・３章で検討されたヘーゲル＝マルクス的な労働モデル、つまり本質的に自己疎外を伴う生命活動としての労働、そして市場社会における、生産過程で日々の必需品を生産するための疎外された労働といった想定のもとにあり（馬渡 2025a: 93）、不可避なものであるからだ。

5 無論こうした立場はベナナフの言う社会変革への取り組みの重要性を否定するものではない。この事情については既に述べたとおりで、別の表現で言えば「資本主義的工業化と資本主義的技術とが除去されて始めて、工業化と技術一般の諸恩恵が目に見えるもの、現実化されたものになりうる」（Marcuse 1967=1968: 14）のである。

6 それゆえ３章冒頭でも述べた通り、アドルノらによる科学技術の自然支配的性格の指摘や道具的理性批判に対して、マルクーゼのオートメーション・ユートピアは一つの「解放のテクノロジー」の可能性を提示していると見ることもできるのかもしれない（馬渡 2025a: 255）。

7 馬渡は注で「『遊びの衝動』は、理性と感性を和解させるために必要となる」として、「遊び」概念にそうした対立の克服を期待するようだが、残念ながらマルクーゼに内在する形でその理路は提示されていない（馬渡 2025a: 237）。

8 なおグランターによれば、この循環はマルクーゼの遊び論が依拠するシラーもまた同様に抱えていた問題である（Granter 2007: 87）。

9 トルコの社会学者アフメット・オンジュ（2017）は、トルコにおける「技術者のソビエト」の具体例を、「トルコ技術者・建築家会議所連合会（Union of the Chambers of Turkish Engineers and Architects）」に見出す。オンジュによれば、「ヴェブレンが一つの可能性として構想したものは、彼の関心からはおそらくもっとも遠く離れた国であるトルコの文化的背景のもとで歴史的現実となったのである」（Öncü 2017: 68）。詳細はオンジュ（Öncü 2017）をご参照いただきたい。

10 研究者が社会運動に関わる条件を「批判的科学ネットワークの形成」という観点から分析した社会学者の立石裕二（2013: 147-70）は、宇井のような「争点志向」の研究者が増える条件の一つとして、「政治的な活動に加わるのを躊躇させるような社会的圧力から研究者を守る仕組みを整えること」（立石 2013: 169）を挙げている。宇井の活動は、科学労働者自身がそうした取り組みを後押ししていくという意義を持つと考えられる。

11 もちろん、水俣病運動の支援者と患者との「連帯」はそれ自体として患者の尊厳の回復を求める「承認をめぐる闘争」でもある（成 2003）。

12 「わっぱの会」については伊藤綾香（2016a, 2016b）を参照した。なお、わっぱの会の人々の活動が、オートメーション・テクノロジーが触媒となって生じたものなのかどうかについては必ずしも明らかにすることができなかった。この点は本稿の限界であり、今後の課題として指摘しておきたい。

13 さらに、「生産性」批判を「承認をめぐる闘争」の実践として解釈することができれば、本書第 2 章第 3 節におけるように「生命活動としての労働」を「承認をめぐる闘争」として理解する解釈の狭さを拡張することにもつながるだろう（馬渡 2025a: 74-8）。

14 ただし、既に馬渡自身もこうした問題を自覚しており、マルクーゼら第一世代の議論を土台とした現代のエコロジー論や社会理論の検討も並行して行われている（馬渡 2025b）。この点でも、今後の

研究の発展が期待できるだろう。

文献

Adorno, Theodor W., 1962, „ Über Statik und Dynamik als soziologische Kategorien,“ *Sociologica II: Reden und Vorträge*, Frankfurt am Main: Europäische Verlagsanstalt, 223-40. （三光長治・市村仁・藤野寛訳，2012,「社会学のカテゴリーとしての静学と動学」『ゾチオロギカ——フランクフルト学派の社会学論集』平凡社，300-26.）

Altenried, Moritz, 2022, *The Digital Factory: The Human Labor of Automation*, Chicago and London: University of Chicago Press.（小林啓倫訳，2024,『AI・機械の手足となる労働者——デジタル資本主義がもたらす社会の歪み』白揚社.）

Benanav, Aaron, 2020, *Automation and the Future of work*, London: Verso.（佐々木隆治監訳，2022,『オートメーションと労働の未来』堀之内出版.）

Braverman, Harry, 1974, *Labor and Monopoly Capital*, New York: Monthly Review Press（富沢賢一訳，1978,『労働と独占資本』岩波書店.）

Celikates, Robin, Axel Honneth, and Rahel Jaeggi, 2023, “The Working Sovereign: A conversation with Axel Honneth,” *Journal of Classical Sociology*, 23(3): 318-38.

Feenberg, Andrew, 2023, *The Ruthless Critique of Everything Existing: Nature and Revolution in Marcuse’s Philosophy of Praxis*, London: Verso.

Granter, Edward, 2009, *Critical Social Theory and the End of Work*, Farnham: Ashgate.

Hardt, Michael and Antonio Negri, 2004, *Multitude*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.（幾島幸子訳，水嶋一憲・市田良彦監修，2005,『マルチチュード——＜帝国＞時代の戦争と民主主義（上）』，日本放送協会出版.）

日暮雅夫，2016,「労働・承認・闘争——アクセル・ホネットの「労働と承認」論」田中拓道編『承認——社会哲学と社会政策の対話』法政大学出版局，131-56.

平野恵嗣，2023,『もの言う技術者たち——「現代技術史研究会」の 70 年』太郎次郎社エディタス.

本田由紀，2011,『軋む社会——教育・仕事・若者の現在』河出書房新社.

Honneth, Axel, [1992] 2003, *Kampf um Anerkennung: Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte: Mit einem neuen Nachwort*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（山本啓・直江清隆訳，[2003]2014,『承認をめぐる闘争——社会的コンフリクトの道徳的文法〔増補版〕』法政大学出版局.）

————, 2003, „Umverteilung als Anerkennung: Eine Erwiderung auf Nancy Fraser,“ Axel Honneth und Nancy Fraser, *Umverteilung oder Anerkennung?: Eine politisch-philosophische Kontroverse*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 129-224.（舟場保之・中村修一訳，2012,「承認としての再配分——ナンシー・フレイザーに対する反論」加藤泰史監訳『再配分か承認か？ ——政治・哲学論争』法政大学出版局，117-216.）

————, [2008] 2010, “Arbeit und Anerkennung: Versuch einer theoretischen Neubestimmung,”

Das Ich im Wir: Studien zur Anerkennungstheorie, Berlin: Suhrkamp Verlag, 78-102.（日暮雅夫・宮本真也訳，2017,「労働と承認——新たな理論的規定の試み」日暮雅夫・三崎和志・出口剛司・庄司信・宮本真也訳『私たちのなかの私——承認論研究』法政大学出版局，84-112.）

————, [2011] 2013, *Das Recht der Freiheit: Grundriss einer demokratischen Sittlichkeit*, Berlin: Suhrkamp.（水上英徳・大河内泰樹・宮本真也・日暮雅夫訳，2023,『自由の権利——民主的人倫の要綱』法政大学出版局.）

————, 2023, *Der arbeitende Souveraen: Eine normative Theorie der Arbeit*, Berlin: Suhrkamp. (Daniel Steuer, trans., 2024, *The Working Sovereign: Labour and Democratic Citizenship*, Cambridge: Polity.)

星加良司，2011,「障害者は「完全な市民」になりえるか？」松井彰彦・川島聡・長瀬修編著『障害を問い直す』東洋経済新報社，229-57.

伊藤綾香，2016a,「障害者運動における障害者と健常者の連帯的活動の展開——1970 年代の「わっぱの会」の活動を事例に」『福祉社会学研究』13: 82-105.

————，2016b,「「わっぱの会」における対抗文化的手法の変遷」『社会学年報』45: 51-61.

岩熊典乃，2012,「アドルノにおける＜自然＞と客体の優位——ハーバーマスによるアドルノの自然論解釈をめぐって」『経済学雑誌』113 (2), 47-64.

小松史朗，2021,「ブレイヴァマン・テーゼの再検討 ——その発展的継承のために」『同志社商学』72(5)，789-816.

今防人，2009,「コミューンはどこへ行ったのか？」岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編著『戦後日本スタディーズ 2——60・70 年代』紀伊國屋書店，185-200.

松永伸太朗，2017,『アニメーターの社会学——職業規範と労働問題』三重大学出版会.

Marcuse, Herbert, 1967, *Das Ende der Utopie*, Berlin: Verlag Maikowski.（清水多吉訳，1968,『ユートピアの終焉』合同出版.）

馬渡玲欧，2019,「マルクーゼの「労働と遊び」論再考——ホネットによる生産美学批判を参照点に」『社会学研究』103: 139-63.

————，2025a,『ヘルベルト・マルクーゼ——オートメーション・ユートピアの構想と展開」ナカニシヤ出版.

————，2025b,「フランクフルト学派第一世代の社会思想に基づく現代エコロジー研究の動向——アンドリュー・ビロー編『批判的エコロジー』をもとに（研究ノート）」『人間文化研究』(43), 262-75.

三家本里実，2024,『AI 時代の労働の自律性と資本の統制——ブレイヴァマンの労働過程論をめぐって』堀之内出版.

中根多惠，2023,「「労働」カテゴリーに抗う音楽家たちによる連帯への模索——芸術性と労働性の間にある「労働的なもの」のジレンマをめぐって」永田大輔・松永伸太朗・中村香住編著『消費と労働の文化社会学——やりがい搾取以降の「批判」を考える』ナカニシヤ出版，223-240.

野村正實，1993,『トヨティズム——日本型生産システムの成熟と変容』ミネルヴァ書房.
大河内泰樹，2010,「コミュニケーション・承認・労働——A・ホネットにおける批判的社会理論の準拠点」『唯物論と現代』45: 58-71.
Öncü, Ahmet, 2017, “On the Possibility of a “*Soviet of Technicians*”: Veblen’s Cumulative Causation Applied to the Turkish Case,” *Review of Radical Political Economics*, 49(1): 67-82.
Reitz, Charles, 2022, *The Revolutionary Ecological Legacy of Herbert Marcuse*, Québec: Daraja Press.
猿田正機，1998,「変貌するトヨタの生産・労働システムと労務管理——田原工場を事例として」『中京経営研究』8(1), 67-101.
Stahl, Titus, 2013, “What is Immanent Critique?,” SSRN, (Retrieved July 16, 2025, https://ssrn.com/abstract=2357957).
成元哲，2004,「承認をめぐる闘争としての水俣病運動」『アジア太平洋研究センター年報』1: 9-14.
立石裕二，2011,『環境問題の科学社会学』世界思想社.
徳永恂，1974,『ユートピアの論理——フランクフルト学派研究序説』河出書房新社.
————，2002,『フランクフルト学派の展開——20 世紀思想の断想』新曜社.
Višić, Maroje, 2019, “Renaissance of Herbert Marcuse: A Study on Present Interest in Marcuse’s Interdisciplinary Critical Theory,” *Interdisciplinary Description of Complex Systems*, 17, 659-83. (Retrieved August 16, 2025, https://www.researchgate.net/publication/336675627_Renaissance_of_Herbert_Marcuse_A_Study_on_Present_Interest_iin_Marcuse’s_Interdisciplinary_Critical_Theory）

（いちかわ　ゆうき、東京大学大学院人文社会系研究科、yuk1.1ch1k4w4@gmail.com）
（まつざき　たくみ、東京大学大学院人文社会系研究科、jihen0718@gmail.com）
（査読者　河合恭平、井口尚樹）